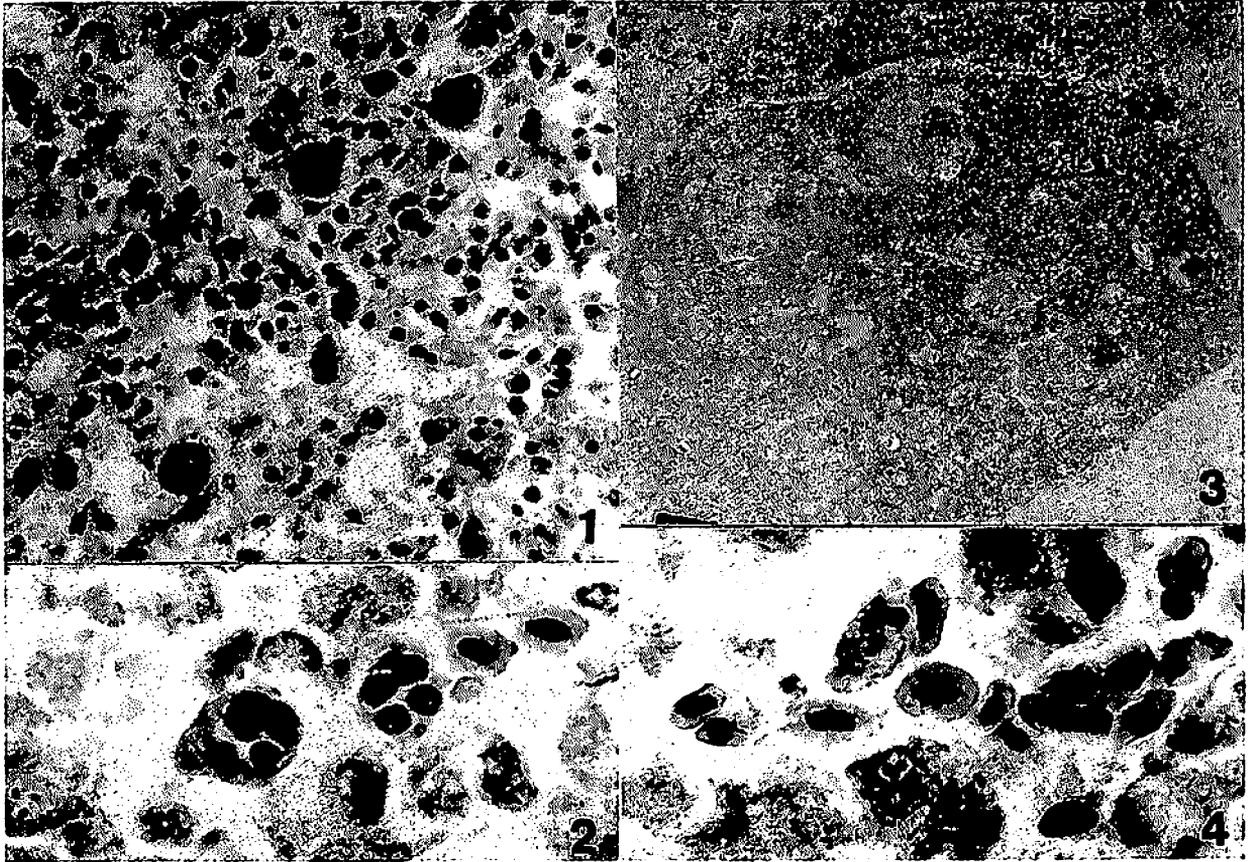


ナベツルの肝・肺

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第23回獣医病理学研修会標本No.391



動物：ナベツル、幼鳥、雌、体重2.0kg。

臨床的事項：国の特別天然記念物となっている鹿児島県出水市出水平野の越冬ツルは1982年1月1日にはこれまでの最高に達し7000羽をこえた（日本野鳥の会）。ナベツルはその86%を占め、越冬期間は10月下旬から3月上旬であるが、12月中旬頃からナベツルの幼鳥20羽が連続して死に、その中の3羽の病理学的検査を行った。標本はその一例である。

剖検所見：栄養や、不良、筋胃内容少量で、小腸内容は水様性、盲・直腸便少量であった。肝臓は赤褐色、表面および剖面に針頭大の白斑を認め、肺には黄白色の粟粒大～大豆大結節が散在し、その内部は黄白色や、硬固であった。その他の臓器にはとくに異常はみられなかった。

組織学的所見：肺の結節は広汎な壊死巣を示し、その中の旁気管支腔にアスペルギルス属特有の分生子頭が認められ、壊死組織中にある多数の菌糸とともにPAS染色で強陽性に染め出された。

肝の白斑は結合織増生部に一致し、多数の巨細胞様構造がその中に見出される。門脈域を中心に、肝細胞の崩壊と食細胞や顆粒白血球を主体とする細胞浸潤、および結合織増殖を示す病巣が弥漫性に多発し、胆汁鬱滞も顕著であった。様々の形態の巨細胞様構造が主に血管腔、肝細胞内にみられ(写真1)、時には胆管上皮や内腔に認

められた。血管腔内に黄褐色色素を多量に容する大食細胞が数多く存在するが、鉄反応で強陽性を示し、肝細胞内にも陽性顆粒を多数認めたので、大量の溶血が起ったことが推測された。巨細胞様構造は好酸性の原形質を辺縁部に持つものも持たないものもあり、好塩基性の核を多数持つ多核巨細胞様のものが多く、円形(径約14 μ m)から長円形(約14 \times 18 μ m)、あるいは更に長大な形になり、その中にある核も円形(径約2.5 μ m)から長円形(約2.5 \times 3.8 μ m)と変化する。長円形になった核構造が遊離して行く像も認められた。これらはPAS染色で陰性か弱陽性、Giemsa染色で濃青色に染るが、核の中の小核部分は赤染し、Plasmodiumのmerozoiteの染色性によく似ている(写真2)。ホルマリン固定材料を電顕用に処理し観察したら、多核巨細胞(写真3)と内部に小細胞を形成する巨細胞が認められ、電子密度がかなり高く、小器官も正常細胞とは異なるものであった。この巨細胞様構造は腸・腎・肺・心等の主に血管腔に認められた。以上の所見からトリマラリヤを疑い、Giemsa染色した肝切片で血管内の赤血球を検索し、約2 \times 3 μ mの虫体とマラリヤ小体を検出した(写真4)。多核巨細胞は赤外型であろう。

病理組織学的診断：ナベツルにみられた、トリマラリヤを疑う肝炎とアスペルギルス性肺炎。